

むかし「局アナ」いま「隠居」

# 海行かば



上田 博章(絵・文)

1933年徳島市生まれ 大阪府在住  
 ■京都大学農学部林学科卒業  
 ■元朝日放送アナウンサー  
 ■元池田マルチメディア代表取締役  
 ■講演、朗読指導など以外は隠居中



海行かば 水漬く屍  
 山行かば 草生す屍  
 大君の辺にこそ死なぬ  
 かへりみはせじ

「海行かば」は、私にとって  
 哀しい歌なのです。

戦争の時代、ラヂオから  
 「海行かば」が流れて来ると、  
 「あ、アメリカにやられてる。  
 兵隊さんが大勢 戦死した」  
 と思うと同時に、それが  
 自分にもジワジワ近づいて  
 くる薄気味悪さ恐ろしさが  
 伝わって来るのでした。

戦争の末期、サイパンや  
 テニアン、アッツ島などが  
 相次いで玉砕（陥落）した  
 ニュースをNHKラヂオが  
 報じるとき、前奏曲として  
 「海行かば」を流していた  
 ことから、この曲が 負け戦、  
 悲報、戦死、鎮魂歌などと  
 結び付いたようです。

子供のときから、そんな  
 刷り込みをされていた私は  
 「海行かば」は、荘重、陰鬱  
 ながら厳肅なる鎮魂歌だと  
 思い込んでいました。

この「海行かば」の歌詞は、  
 千数百年前に、大伴家持が  
 詠んだ長歌が原典ですが、

歌詞の意味はどう考えても  
 鎮魂歌ではありません。

「陸海の兵士は 例え戦場に  
 屍を曝しても、天皇の側で、  
 心を寄せての戦死である。  
 決して後悔はしないのだ」  
 という 兵士の忠誠心や  
 覚悟、戦意の昂揚を狙った  
 歌なのでしょう。

道理で、「海行かば」は、  
 伴奏を付けるコード（和音）  
 でいえば「長調」の曲です。  
 私の印象ですと 長調の  
 曲は、短調の曲に比べると  
 明るい雰囲気曲が多いの  
 ですが「海行かば」や、同じ  
 長調の「君が代」のように、  
 ゆつたりと、然るべく演奏  
 することで 荘重な雰囲気  
 醸し出し、戦意の高揚にも  
 役立つたのでしよう。

「海行かば」は靖国神社的な  
 事情でもあつてか、戦時中  
 神聖視され「君が代」に次ぐ  
 「準国歌」に位置づけられて  
 いたという記述をネット  
 で見ましたが、「海ゆかば」が  
 準国歌だなんて私は聞いた  
 ことはありません。

＊  
 かつて忌野清志郎さんが、  
 ロック調にアレンジした

「君が代」を歌って、モメた  
 ことがあります。

ことほど左様に「君が代」  
 については色んなお考えや  
 御意見があるようですが、  
 知事や市長、教育長などが  
 懲罰や異動をチラつかせて  
 国歌を無理に歌わせるのも  
 何だかねえ…。

天皇陛下も園遊会で、  
 「強制はよくありませんネ」  
 とおっしゃいました。  
 政治家は陛下のご意向に  
 心を寄せて頂きたいですね。

＊  
 歌が好きな私は、暇さえ  
 あれば 口笛を吹き、鼻歌を  
 歌う輩でしたから、戦時中  
 子供が重労働を強いられた  
 時代、頭の中で好きな歌を  
 何度も繰り返し、苦痛を  
 和らげていました。

倉本聰さんも同じような  
 ことを書いています。

ところで向田邦子さんの  
 随筆集の中に「夜中の薔薇」  
 （「野中の薔薇」と「眠る盃」  
 （「めぐる盃」という 歌詞の  
 勘違いをタイトルに使った  
 作品が、二冊ありました。  
 向田さんも 歌の文句を  
 間違ったまま歌っていたと

知って更なる向田ファンに  
 なったのは 私も「御同様」  
 だったからです。

例えば、一九四二年（昭和  
 十七年）、「進め一億火の玉だ」  
 という戦時歌謡があつたの  
 ですが、その二番の歌詞に、  
 こんな箇所がありました

靖国神社の御前に  
 拍手打って額づけば  
 親子兄弟 夫等が…



この「額づけば」のことを  
 私は「糠漬けは」だと解釈し、  
 「夫等が」は「おっ虎が」と  
 思っていたのです。  
 ちょっと考えれば、  
 「これはおかしいぞ」

と思ひそうなものですが、  
 私は気にせず深くも考えず、  
 意味不明の歌を口ずさんで  
 いました。

日本が戦争に負け、私が  
 中学生になったころ初めて  
 間違いに気づいたので。

「進め一億 火の玉だ」で、「一億 総決起」状態のまま戦争に突入して間もなく、「若い血潮の予科練の」に始まる「若鷲の歌」が評判で、ロクすっぱ漢字も読めない年齢だった私も、機嫌よく歌っていました。

ところが、四番の歌詞のなかに、

「見事 轟沈した敵艦を  
母へ写真で送りたい」

という箇所をアホな私は、「**幽生え写真で送りたい**」だと思っていたのです。

さすがに変だと気付いて、たまたまウチへ遊びに来ていた お隣の榎君に、

「ねえ榎君、**ははえ写真**ってどういうことなの？」

と訊ねたところ、榎君は振り向きもせず、

「そりゃ、**お母さんへ写真**……ってことだろ」

と教えてくれて、大いに納得したことでした。

ところが、この会話を、傍で母が聞いていたのです。「博章は何とバカなことを聞いているの？ 情けないわ」あとあとまでボロクソに言われ続けました。

一九六七年（昭和42年）、ウチの娘が小学校に入つて間もなく、

「お父さん。この『**チヨニヤチヨニサ**』って何のこと？」と聞きにきました。

娘の手許に目をやると、音楽の教科書を開いていて、冒頭のページに「君が代」の歌詞と音符が載っています。



まさか「君が代」の歌詞に「ちよにやちよにさ」はないだろうと、よくよく見ると、ナルホド判りました。

「千代に八千代にさ」までの部分をカタカナで書くと、「チヨニヤチヨニサ……」と、読めるではありませんか。

このように 歌の文句を間違えて読むのは、歌詞に無頓着な私のDNAが娘にちゃんと伝わっている証拠なのでしょう。

「君が代」は耳で聞いただけでは解りにくい歌です。

「きイミイがアアよオわア、ちイよオにイイ」

……こういう歌い方ですから、私も、字が読めないころは歌詞の意味がサツパリ解りませんでした。

ですから「巖となりて」を「**岩音 鳴りて**」だと信じて、ずつとそう歌っていました。

お恥ずかしいことですが二十歳を過ぎてからハツと気付いたのです。

\* 「海行かば」でも私は勘違いしていました。

幼いころ、「草生す屍」のことを「臭む スカバネ」……即ちスカ(的外れ)のバネが、臭い匂いを発する という意味だと信じていたのです。

「臭む」なんていう日本語がありません。

なのに「臭くする」ことを「臭む」と言うに違いないと思ひ込んでいました。

\* 「係り結び」は小学校低学年にはどだい無理です。

「大君の辺にこそ死なぬ」や卒業式の「今こそ別れめ」……

私なんか「今こそ分かれ目」だと思っていました。

戦時中に私が行っていた千駄ヶ谷 第二 小学校に、「曾子」君という、珍しい苗字の男の子が 転校してきました。

家が大衆食堂でしたから、お母さんも忙しかったのでしよう。

半ズボンのお尻が大きく鉤裂きに破れたまま 登校してきたことがありました。パンツを履いてないのか 裂け目からお尻が見えます。

そんなことがあつて以来、「海行かば」の歌詞の中の「辺にこそ死なぬ」という箇所が私の耳には、「**尻 2個、曾子 舐め**」と聞こえたりしました。

「海行かば」を聞いて、私の脳裏に浮かぶのは、兵士の胸に抱かれた英霊の遺骨と同時にズボンの裂け目から見えた曾子君の白いお尻……この歌を巡る私の思い出は「**尻 滅裂**」なのです。

\* \* 「海行かば」の歌詞に関してこんな話を耳にしたことがあります。

むかし、徳島県 板野郡にあった さる国民学校でのお話です。

戦時中の国民学校では、何かというと宮城(皇居)の遥拝とか、校長先生の読む教育勅語を黙祷姿勢で拝聴するとか、君が代の斉唱、紀元節の歌や天長節の歌、明治節の歌なども斉唱して皇室を崇めていました。

戦況が不利になってきて、相次ぐ玉砕の悲報に接したその国民学校では、死者を悼もうと 全校生徒を集め、「海行かば」を、斉唱することになったのです。

ところが運の悪いことにこの学校には、顔がカバとそっくりの怖い先生がいて、生徒たちは彼を「カバ」と呼んで恐れていました。

お察し通り「海行かば」の歌詞には「カバ」が四匹も出てきます。

♪海行カバ 水漬くカバね  
山行カバ 草生すカバね  
生徒達は「カバ」の所だけ声を大にして日頃の鬱憤を晴らすのでした。

これを「晴らすメント」というのだそうで……。